

## 優秀賞論文要旨

# Genderless in Sports

## スポーツのジェンダーレス化

徳 富 郁 香

従来スポーツにおいては、どのスポーツが男性向けもしくは女性向けかという固定概念がある。しかし近頃ではその差が解消されつつあり、同じスポーツを性別に関わりなく男女に分かれて実施するようになった。その1つが野球である。野球は「男性中心のスポーツ」という考え方があったが、近年、女性でも野球をする人たちが増えている。特に女子の高校野球チームは年々増加傾向にある。例えば大阪にある私立履正社高等学校では、男子生徒の男子硬式野球部と女子生徒の女子硬式野球部がある。双方ともに全国的に好成績をあげている。性別に関わりなく同じスポーツを行うことを「スポーツのジェンダーレス化」と呼ぶならば、まさに野球にはその可能性があると推測した。本論文では、履正社高等学校女子硬式野球部を研究対象とし、スポーツにおいてジェンダーレス化がどのように進んでいるのかを研究した。

まずはじめに、男女間のスポーツの差に関する社会認識について論じた。性別によって身体的なイメージの違いがあり、それによって「このスポーツは男性のスポーツ、女性のスポーツ」という適性を当然視する傾向がある。しかし後述するように、男女のすみわけ傾向が時代によって変化することから、スポーツにおける男女の身体適性は社会の固定概念であると言える。また、男子は外で遊び女子は室内で遊ぶというように、幼少期から気づかぬうちに性別に基づいた別行動がとられがちである。例えば漫画においても、少年漫画、少女漫画のように男女で読者が区別されている。さらに、メディアの報道でも女性

は過小評価されることがあり、女性アスリートに対しては誰かの娘や妻であることを前書きされる傾向がある。

日本では、野球は海外から伝承されたスポーツであり、類似のスポーツとしてソフトボールも同時期に伝わった。ソフトボールは主に女性の間で伝わり、一方で野球は、男性と女性、双方に伝えられた。しかし次第に女性はソフトボール、男性は野球というすみわけが見られるようになった。そして今や、再び男女ともに野球をするようになり、現在高校女子野球チームは日本全国で約40チームあり、女子野球リーグや女子プロ野球チームもある。

研究対象とした履正社高等学校女子硬式野球部は、2014年創部当時の部員数は5名と、試合ができる人数ではなかった。しかし、年々部員数が増え、2020年には51名となった。調査当時に遭遇した COVID-19感染拡大の状況下で、部員たちは自ら考えた時間割で自主練をし、またオンラインによる部活動を行った。性別における身体能力の差を感じさせないオンライン部活動はスポーツのジェンダーレス化に繋がる可能性がある。

また指導員4名（女性2名、男性2名）へのインタビューから、指導員全員が10歳までに野球を始めていたことがわかった。彼らが自ら野球をしていた際に感じた問題点は、女性と男性で異なっていた。女性2名の指導員は、男女の筋力や体力の差を感じており、男性の指導員は上下関係に問題を感じていた。問題点だけでなく、野球をすることで多くの出会いがあったという良い点も聞かれた。一方、部員たちへのアンケート調査では、半数の部員が家族の影響により、小学校低学年から野球に興味を持っていたことがわかった。野球をする中で、今後の進路についての不安や男子よりも身体能力が低い点、試合会場に女子用ロッカールームが少ない点に問題を感じていると回答した部員がいた。

これらの調査結果を踏まえ、現在では男女を問わず同じスポーツを共有するようになったが、スポーツを实践するうえでのジェンダーに対する固定概念は未だ存在すると結論づけた。私たちは性別に限らず個々人が異なった能力を持っている。ゆえに自分自身の身体をコントロールすること、自分のしたいスポーツをすることが大事である。男女という差を意識せずにプレーできるよう

になったとき、本来の「スポーツのジェンダーレス化」が達成できるものと考ええる。

